

養育里親

～もうひとつの家族～

16

坂口 伊都

はじめに

前回から里親支援について、実際に里親の体験を基に気づいたことを書き始めました。里親は社会的養護の場の一つですが、実際にはかなり特有な要素が里親にはあるのではないかと感じています。その所以は、里子を家族の営みの中に迎え入れるところから発生しているからでしょう。社会的養護の場の多くは、仕事とも言い換えることができますが、里親家庭は日々生活している場で、そこを拠点に学校や仕事に出かけています。つまり、日常生活に里親としての生活がダイレクトに影響を与え、逃げる場所がない場所であり、そこで繰り広げられる出来事を認識し、里子や里親家庭を護るために何が出来るのかを問い直すことに意味があると

感じました。里親の大変さや美談だけではない部分を言葉にして表現していきたいと思っています。

里親家庭に対する支援は、社会的養護の場である乳児院や児童養護施設と同じようなイメージというよりも、家庭支援と考える方がしっくりくるように思います。そして、親子再統合をした家庭の支援と通じる部分があるのではないかと感じます。児童福祉法が改訂され、親子再統合に力を入れる方針になり、家庭復帰を目指す動きが始まっていますが、児童養護施設等で家庭分離の時期を過ごし、改めて家庭生活に復帰することは当事者の希望があれば上手くいくというような簡単なものではありません。家庭に戻っても、児童虐待が再発し、また家庭分離になるケースもあります。気持ちの上では、児童虐待を繰り返したいと親も思っていないで

しょうし、子どもも期待して家庭に戻りますが、それでも、悲しい出来事が繰り返されてしまうことが起こります。子育ては、どの家庭でもいい時ばかりではなく、葛藤することも多々存在します。

子どもとの関係を作っていく時、何事も起こらないように子どもの言いなりになっても、子どもを力でコントロールしようとしても、子どもは本当に安心することができないでしょう。子どもが自分の欲求を素直に出せず、可愛げのない行動を取ってしまったら、親子の衝突が生まれやすくなり、大人の方が子どもよりも冷静でいることが関係を築く鍵になりますが、そのために目の前にいる子どものことを理解している誰かに縋りつきたくなります。子育てで悩んでいる時は一般論ではなく、この子の行動についてどう見えるのか意見を聞きたくなります。それは、この子との日々の生活の中で困り事を感じ、今の受け答え方でいいのか、何か他にいい循環を引き起すような考え方があれば知りたいと切望しているからだと思います。言い換えれば、それぐらい逼迫しているということです。一つひとつ積み上げてきたわけではないからという思いが不安を煽り、怒ってばかりいなければならない現状に戸惑い、自分が思い描く親子に近づけない焦りを感じるのです。養育里親を実際に行ってみると、いろいろな感情に囚われている自分に気づきます。それを踏まえながら里親支援に展開できればと考えています。

前回に挙げた里親支援は以下の7点です。

- ① 里子の生い立ち・背景を知る
- ② 里子の強み、弱みを知る
- ③ 里親自身の得意、不得意を知る
- ④ 里親家族のバランスを知る
- ⑤ 里親家族の周辺への働きかけ
- ⑥ 行政、地域への働きかけ
- ⑦ 何を目標にするか考える

今回は、①と②について書きました。ここでは、長期でも短期でも、子どもと別々に暮らす体験があると、その間の子どもが見えなくなるので、「この子」に注目して関係する大人達が語りあうことが子ども理解へとつながるのではないかと感じた部分を書いています。

今回は、③と④の項目について書きたいと思います。どうぞ、最後までおつき合ってください。

里親自身の得意、不得意を知る

里親も親も子育てに関して初心者の方が必ずあり、子どもも性格がそれぞれ違い、上手く子どもと関われる部分とそうでない部分が出てきます。私には実子が2人いますが、全くタイプが違います。息子の方は、家族とあまり話そうとしませんが、娘の方は、「ねえ、聞いている？」と叱られるぐらいによく話をします。好きな食べ物も違い、兄は辛い物が好きでも娘は全くダメ。娘はクリーム系の料理が好きですが、兄は嫌いです。兄はマイペース人間ですが、妹の方は兄の叱られている姿をよく見て、賢く立ち回っているように感じます。親としては、同じように育てているつもりですが、子どもに与える影響は、兄妹としての立場でも変わってくるでしょう。

乳児の時の育てやすさ、にくさも兄妹で違いがありました。兄は、よく夜泣きをする子でしたが、ニコニコよく笑う子で、行きかう大人達に「かわいいねえ」とよく声をかけられていました。妹の方は、人見知りがひどくて祖父と目があっただけでも泣き出す時期がありました。今は、兄の方が他者に対して慎重派で、妹は年代がかなり年上の方でも平然と話をするタイプ

になりました。

このように兄妹でも差がありますから、里子が来たら違う部分が多くあって当然です。子どもがいない里親夫婦の方が、子育てした経験がなく、中途養育をすることに戸惑い、私に対して「子育て経験があるから何でもよくわかるでしょう」とおっしゃるのですが、里子を受けて何年も一緒に生活しているのであれば、それは立派な子育てで、子育て経験がないということに囚われなくてもいいのではないかと感じます。それを誰かが言葉にして伝え続けることも支援の一つでしょう。

そして、子育て経験が里子の養育への妨げになることもあると感じています。例えば、「それ取って」と子どもに言えば、子どもが「はい」と渡してくれるとイメージするのですが、里子は聞こえないフリをしたり、「うーん」と言ってなかなか動こうとしません。私からすれば、イメージと全く違う反応をされ、「何で？」と怒りも含めた感情になりました。

里子の年齢にもよりますが、大人を信頼できる存在として感じていない場合、子どもに情を押しつけて上手くいかなかった経験をしました。大人に頼ることを知らずにきた子どもは、いきなり情を前面に出して近づいてくることに違和感を抱くようです。スタートラインでは、その子が物体等を通して見える形で助けてもらったという経験を積む方がわかりやすく、日常の環境から手助けするイメージを持つとわかりやすくなります。素直に甘えられるわけではないので、甘えさせてあげたいと思う里親の方が傷つきやすくなります。

里親も親も人ですから、何でも万全にできるわけではなく、小さい子どもの世話が好きな人がいたり、ある程度話し合いができるような年頃の方がいいという人もいます。また、子育ての中でも得意分野と苦手なことが必ずあり、子どもの方も言動でよくわかる子と何を考えてい

るのかよく掴めないと感じる子もいます。

家事も同様にお菓子作りが好きな人は、手作りおやつをいろいろ工夫して作り、美味しいと食べてくれる子どもの姿を見れば嬉しく感じるでしょうが、苦手だと思っている人に手作りおやつを作ってあげるべきと言われれば、それはストレスになります。好きなことは苦になりませんが、苦手なことをするのは辛いものです。そこに罪悪感を抱く必要はないでしょう。自分自身ができるだけストレスにならないやり方にすればいいのではないのでしょうか。手作りおやつが苦手なら、市販のお菓子で十分だと思います。子どもと一緒に「美味しいね」と共有できる時間を持つ方が、無理して作るより余程有意義です。

そして、里親自身にも子ども時代があり、親との経験が子育てに大きく影響を与えます。その癖や得意、不得意を知っておくことが有益に働くと感じます。

例えば、私は門限の時間を軽く見られることが苦手です。私が子どもの頃は、門限が非常に厳しい家で育ちました。おまけに母子家庭なので、母を怒らせると誰も庇ってくれない環境下にありました。門限に遅れると母の機嫌が悪くなり、その辺の物にあたるのが1週間続きました。その間、子どもの私はできるだけ物音を立てずに母の怒りが収まるのを待ちました。何故か、決まって1週間怒り続けると母は落ち着くのですが、それまでの時間がたまらなく辛く、家での居場所がなくなる思いをし、母を怒らせないために先手を打ったりして、子どもながらの細心の注意を払って過ごしていました。

次は私が親の立場になると、子どもが遅い時間までなかなか家に戻ってこないと自分の気持ちが落ち着かなくなります。少しぐらい遅くなくても、大丈夫と思える人も多いでしょう。また法律で、門限時間が定められているわけではなく、その価値観は受け手側の大人によって対

応が大きく異なってきます。私が門限を破ったことに腹を立て注意をした際、子どもが「ごめんなさい」と言えば、その場は収まりますが、反抗されると私の感情が揺れ動きます。私は子どもの時、神経をすり減らしてやってきた最大級の課題なので、それを無視した子どもに何とか言う事を聞かせようと必死になってしまいます。しかし、言えば言う程子どもがそれに乗るはずもなく、悪循環をしばらく繰り返し、苦悩する母親になるだけです。

門限の時間や破る頻度、子どもの年齢、性別等によって危険度は異なりますが、私自身がこの出来事に過敏に反応しているのか、いないのかが、今後の親子関係を左右させることに繋がります。私のこの感情は、普段は気がつかずに過ごしていますが、同じシチュエーションに遭遇し時、子ども時代の私の感情が登場します。子どもの対応に上手く立ち回れずに、子どもとの関係がギクシャクしていく時は、子どもの行動だけでなく大人側の揺れも大きな要因となると考えた方が良さそうです。自分の苦手が頭でわかっている、感情を切り替えることは難しいと痛感しています。理性と感情は違うのでしょう。自分のザワザワする感情を無くすことはできないと思うので、「自分が苦手なこと」と意識するようにしています。そうすることで、子どもへの不適切な行動を減らすように努力しています。

今回は、私の一例を紹介しましたが、子どもの起こす行動で大人側が知らず知らずに揺れてしまう出来事は様々起きます。その他、その時の自身の体調や周りとうまくいっているかどうか、気になる問題を抱えているか否か等で、感情が揺れやすくなっていることもあります。この程度ならいつもは笑って過ごせるが、今は余裕がなくて大きな声で怒ってしまったという時もあります。その時は自己嫌悪に陥りますが、里親も人間なので失敗ぐらいします。要

は、その後どのような行動できるかです。子どもに振り回される感覚はありますが、大人の方が子どもよりも立場が強いことに変わりはなく、子どもに与える影響も大きいものです。子どもよりも賢く振舞うためにも自分の得意、不得意は知っておくと自分に少し余裕が生まれると思います。



里親家族のバランスを知る

里親としての生活を始めると、必ず家族関係に変化が生じます。家族成員が増えるということは、想像以上に影響力がありました。今までと違う体制で暮らすのですから、変化が起きて当たり前なのですが、私の感覚の中にこれまでの生活そのものの中に新たな家族が増えるイメージを抱きがちになりました。それは、まだ体験していないのでイメージが持てないこと、家族との生活基盤が出来上がっていることがそうさせるのだと思います。いろいろな心構えをしても、どのようなトラブルが発生するかは、現実の中でしかわからないことです。

家族の営みは、子どもの成長でもバランスが変わり、どこの家族であっても日々変化しています。ステップファミリーも、子どもにとってみれば、親と呼ばれる片方が違う人になり、

時には血の繋がりが無い子どもが兄弟姉妹となるという大きな変化が起こり、混乱しやすくなります。里子として新しい家族と暮らし始めるその子自身の変化は、想像を絶するものですが、受け入れ側の家族も一端バランスを崩すものでした。その状況変化が、当事者達にはわかりにくく、無意識に元の家族のバランスを維持させようとしてしまう感覚になりますが、どんなに小さな子どもであってもその影響力は大きく、新たな家族バランスに移行していくものだと理解することが大切だと感じました。

我が家の場合、里親委託前にあまり語らなかつた息子に一番大きな変化が起こったように見えました。息子は、外泊の時に積極的に里子と関わってくれました。それまで、家族と外食するのも嫌がっていたのですが、家族と行動を共にし、よき兄になろうとしてくれていたのだと思います。父が不在の時は里子と一緒に入浴をし、かけ算を教えたりしていました。ですが、だんだんと距離を置くようになり、里子の相手をするのを嫌がるようになり、今は全くタッチしていません。予測ですが、息子はよき兄になろうとして挫折したのではないかと思います。里子は、真っ直ぐな表現をせずに相手をイラッとさせる返答をすることがあります。兄の方も妹を可愛がるような記憶をなかなか思い出せないで、里子にきつめな言い方になっていたのかも知れません。里母の私も里子の表現の仕方に傷ついたので、息子が頑張っただけで挫折した感覚を抱いたとしても不思議はないと感じます。今にしてみれば、頑張り過ぎていないかという視点で息子を支えてやればよかったと後悔しています。仮にそれをしたとしても、今の状況に変化なく、息子はわが道を歩んでいたかも知れませんが、娘のように揺れを見せなかった息子に対する認識の甘さを感じています。

どの子どもでも、手を差し伸べてほしいところは違いますが、手をかけることが前提という事を

忘れていました。息子と他の家族の関係も希薄になっていますが、妹が話しかければそれなりに応じています。父と母に関しては、その時に話をする必要がある時、話をしてもいいと思う時に少し返事をします。その時に父と母、どちらが近くにいるかで相手を決めているような雰囲気です。里子の関係というよりは、両親との距離感を作っている印象を持っています。今息子は、里子との接点をあまり持っていませんが、里子の方は息子のことをよく見えています。「お兄ちゃんがな、部屋で大きい声で歌って、うるさいねん」等の話題が出てきます。また、兄に対して両親がどのような対応をしているのかも里子だけでなく妹である娘もよく見えているので、兄だけが特別扱いされていると思われぬように伝えていくことも大事なのでしょう。

娘は、委託以前に女の子を希望していましたが、結果として弟になりました。娘自身がどう感じているかわかりませんが、女の子が来ていたら娘はもっと揺れたかもしれないと思います。同性だったら、知らず知らずに比べてしまったり、親の取り合いになって焼きもちをやいたりということが起きていたかも知れません。娘は里子に対して、どこか割り切ったところがあり、里子のイライラを誘う態度に面と向かって怒ったりする時もあるのですが、一緒にバドミントンをしたり、ゲームをしたり、私が怒っている時には上手にフォローしてくれます。その様子を見ていると自分を押し殺して無理をしているようには見えず、自然体で過ごし、里子を受け入れたことを割り切っているような印象を受けます。娘は、「里子を受け入れないなら受け入れなくても良かったが、受け入れたんだから今さら他の選択肢をいちいち考えても仕方がないでしょう。それと、急に下が出来てもどう扱ったらいいかとかわからなかったし。友達から聞いていた弟の話と同じで、本当ビックリしたわ」と話していました。娘は、自分の気持ちをスト

レートに表現してきました。里親をするかしないかの時も私に質問をして涙を流して訴えてきました。受験をしている今も情緒不安になりながら、気持ちを出しています。時には心配もしますが、気持ちを表現しながら自身の中を整理していくタイプようです。里子は姉を見て、いつもうるさいと言いますが、姉の出し方を見ながら、そういう表現方法もあるのだと知ってくれば良いなと思います。

娘は、父母のどちらにも気持ちをぶつけているように見えます。受験生のストレスはかなり大きいようですが、学校での出来事や塾での先生との話もしてくるので、気持ちを落ち着かせる対象になっているようです。娘から「最近、扱い方が雑だよ」と叱られて、母と入浴することを拒むようになってきましたが、いろいろな話をしてくれるのは有り難いと感じます。母とのお出かけも所々にあり、娘と母の時もあれば、そこに里子が一緒に時もあります。里子が楽しめないで、3人で出かけることは減りましたが、父も含めて4人になると男性と女性に分かれて散策をしています。あまり意識はしていませんでしたが、それぞれに親を独り占めする時間が出来ていたようです。

父は里子にとって特別な存在です。父の傍にいたがります。その父に対してもかわいい表現をできるわけではありません。この前も足にしもやけができて痒くて仕方がないというので、治し方をいろいろ調べて実行していたのですが、靴下を履かずにいるので、父が「靴下履きなさい。言うこと聞かずにまたしもやけになっても次は何もしないよ」と言うと、困るどころか「うーん、いいよ」と答えていました。両親揃って「・・・」と返す言葉が見つかりませんでした。悪気はないのですが、予測した返答とかけ離れていることが多いです。しもやけになった時も「親の言う事を聞かないからなるんやで」と皆に言われ、「エへへ」と笑っていました。

1年の生活を通して、里子はこの父と母はいなくならないで、何か気まずいことが起きても次の朝も機嫌悪く居続けて、この人達と仲直りしないと居心地が悪いということは、わかったようです。以前は、母から叱られると挑発するようなことをよく言っていたのですが、しまったと思った時は「アハハ」と笑ってごまかすようになりました。「はい」という返事はまだできませんが、笑って挑発を止めるという行動ができることは大きな成長だと感じています。里子も父にべったりではなく、友達と約束をして遊びに行ったり、部屋でモノ作りをする事時間も増え、家族それぞれが家の中で自分のしたいことをするようになってきました。

夫婦関係は相変わらず、私が怒っていることが多いですが、夫なりに考えを所々で表明して関係を修復しています。こうして改めて考えると、家族間の関係性は、里子によって大きく揺らぎましたが、自分達のペースを取り戻してきているようです。新たな家族バランスの中で、子ども同士が競争相手になっていないことが大きいのかも知れません。里子との生活が1年以上経ち、新たな家族のリズムが出来てきたのではないかと感じます。今は、冷静に家族の動向を見ている私がありますが、それまでは自分自身も駄目な里母と里子に言われているような気がして、追いつめられていました。子どもを一人迎えるという事は、今までの家族のバランスが崩れることだと思います。そこからくる戸惑いが出てくることを支援者は意識をして、何が起きているのかの整理を里親と一緒にしていくことも支えに繋がると感じます。

里親をしようとする時、一緒に暮らしている家族にも変化が起きますが、親戚等の周辺にも衝撃が走ります。里親自身が同居家族内の話し合いを重ねることはしやすいですが、周辺の人々に対しては、行政として児童相談所のワーカーが説明をする機会を作った方が、理解が進

むと思います。他の里親さんの話の中に葬式や法事の時は里子のショートステイをお願いすると耳にします。私達の場合も委託前に自分達で説明をすると、勝手なことをしているとされました。違う立場の人が説明をする機会を作ることで、公の制度を担うことが伝われば、周りの人々の意識や印象が変わるのではないかと感じています。

終わりに

養育里親と支援者の両方の立場で話をして欲しいと依頼されることがありますが、支援者側の方に里親登録をしてから待っている事の辛さや実際に里親の立場になると、支援者の何気ない「その後、どうですか？何か困っていませんか？」の声掛けに評価されるという気持ちが出てくること等に驚かれます。私自身も支援者の立場も知っていますから、その方が評価しようというのではなく、困ったことがあったら言ってくださいねという気持ちを持っているのだらうと思いますが、不思議なものでほとんど反射的に言いにくくなります。「〇〇ちゃんが、夜なかなか寝ないと言っていましたが、最近はどうですか？」等、具体的な出来事から質問してもらおうと、それについてはと答えやすくなります。

以前に、「できるだけ冷静に現状を見ていこうとしている坂口さんでも、気持ちが揺れるのですね」と感想を頂いたこともあります。頭の中でわかっていることでも、感情が伴うわけではないようです。「わかっちゃいるけど、できない未熟者」だと痛感しています。里親は、プライベートの中に子どもが登場するという混乱が多く起きていると感じます。知識と感情が混濁して自分の中をコントロールすることが難しくなります。感情を優先させると、子どもとの関係が上手く回らなくなる経験をしてきました。ま

ずは、子どもを理解することからがスタートだと思います。里親をしようとする人は、それまでかなりの葛藤を経験し、正義感が高い状態にあると思います。その人が、頑張ってしまうと子どもに情の押し付けをしてしまう結果になりやすいので、頑張りすぎないことを意識することを大事だと実感しています。支援者は、冷静にそして温かく里親家族を支える存在でいた欲しいと願っています。

